

序章

数少ない親友から、戦場へと赴いてその人の代わりに魔女たちを助け、彼女たちの斥候として行く道を照らしてほしいといわれたら、あなたはとうするだろうか。

そして、自身にそれをなすだけの力があるのだとしたら。

自分、すなわち扶桑陸軍東部第二十二部隊所属の初美あきら少尉には、それだけの力があり、戦場に向かうための資格もあった。

だから、最初はカールスラント皇帝の「一人の犠牲者も出さず、全員を欧州より撤退させよ」の大号令のもと行われたダイナモ作戦（後にダンケルクの呼び名で有名になり、同時にかの精銳部隊、ストライクウィッチーズ設立のきっかけにもなった）にも参加したし、ブリタニアでは逃げ延びたウィッチたちにサバイバル技術や自分が修めた武術の教練も行った。その際、ブリタニア女王陛下より騎士の叙勲をうけたり、ある人物と知己を得たりしたのだがそれはおいおい語ることもあるだろう。

ともかく、ブリタニアでの役目を終えて扶桑に戻ってから、新しくできたその親友にダイナモ作戦のことや避難民たちの様子を伝えると、その人はたいそう心を痛めた。あれほどの沈痛な面持ちは、どんな人間でも浮かべられるものではない。

そして親友は、自分がそこへ行けないかと言いつつ出した。

確かにその人物はウィッチとして途方もなく高く強い魔力があり、扶桑皇国においてはほとんど不可侵に等しいほどの権力もあったが、それは戦場にいかせるわけにもいかない立場の人間である

ことも意味していた。

自分は慌ててそれを諫めると、かの人はこう言い放った。

ならば、あきらがわらわの代わりにいってほぐれないか、と。自分の代理としてではなく、親友として自分のかわりに再度赴いてはくれないか、と。

彼女の悲痛な想いは、我が身ならずとも理解できたが、自分は数日待つてくれ、と答えた。なぜなら、自分一人で解決できるような問題ではないからだ。

そして、自分ほかの人の願いを叶えるべきか、武術の師匠に相談したところ、その願いは絶対にかねるべきだ、と強く勧められた。

師匠には師匠の思惑もあるのだろうが、自分はそれを問わず、師匠の言う通りにした。

そして自分は渡欧した。

友人の願いを叶えるために。

これから語る独白めいたこの物語は、友人の願いのために欧州で様々な戦線を渡り歩いた、通称《くノ一の魔女》、初美あきらの戦記である。

一之卷

まだ正午前の昼間だというのに木々の枝に覆われているため、黄昏時のように薄暗い森の中を、背負子とそれに乗せて

いる燃料缶を背負いつつ、カールスラント陸軍のⅢ号戦闘脚で進んでいた。

ネウロイがいなければ、きつと鹿や猪、狼もいただろうこの黒い森を慎重に、ゆつくりと、魔道エンジンの音を響かせながら。

緑と土のにおいが漂う。

黒いこの森は当然扶桑の森と違う植生ではあるが、このあたりの可食なキノコや野草は一通り頭の中に入れているので、いざということが起きた時の対応に問題はない。

遠くから怪鳥の声が聞こえてきた。

おそらく、陸戦ネウロイが何体かそう遠くない場所をうろついているのだ。

ここが、まだ人類が取り戻していないネウロイの支配地域であるのだから、奴らの声が聞こえてくるのは当然と言える。

自分は固有魔法の《迷彩》を使いながら、この危険極まりない森を進んでいく。《迷彩》とは、迷彩色のフィールドが体を包んで、電波や魔道波をシャットアウトする固有魔法だ。長時間使用可能で斥候をやるには実に便利なのだが、これを使っている間、無線通信が不可能になってしまうという欠点がある。

必然、自分は主たる任務が単独性が高いものになっていくのだが、そのおかげで何度か命の危険

を経験したことがある。

今、自分がこうしてこの森を進んでいるその理由だが、ここから先数キロの地点にカールスラント空軍のウィッチが一名墜落していて、彼女の救出をしてほしいという依頼が名指しでされたからだ。救出対象のウィッチが所属する部隊の隊長は、ダイナモ作戦時に《迷彩》を使って偵察任務に就いていた自分を知っているどころか、その様子を見てきたらしい。自分に覚えはないのだが、その隊長は自分の偵察のおかげで逃げ切れた部隊に所属していたと言っていた。

なんでも初陣を飾って数日の新米ウィッチだそうで、偵察の途中でネウロイと交戦、撃破するも、混乱のうちに進路を誤りこの辺りに燃料切れで墜落した。

幸い救助対象者のウィッチは通信が可能だったので、その通信をアンテナ持ちのウィッチが受信、居場所を割り出したうえで、自分に彼女の救出を依頼して来たというわけだ。

新米ウィッチは、目印に白いスカーフを隠れている木の枝に縛りつけておくと言っていたという。一応、自分は扶桑陸軍の遣欧部隊所属ではあるのだが、友人の影響もあって比較的自由な作戦活動を許されていた。ただ、その時自分は、別の偵察任務でガリアに向かう予定であったのだが、そこをおして頼む、自分の上官にもこちらから話を通しておくから、とまで言われたのだ。

結果、ガリアでの偵察任務は別のウィッチが担当することになり、自分は救出任務に向かうことになった。

とはいえ、自分が参加している派遣部隊には陸戦ユニットなど支給されていない。それならばと、

無理を推してきた彼らへの条件として、Ⅲ号戦闘脚と砲弾の用意をしてくれるならやらないことはない、と言ってやったら、あいつら本当に持つてきてしまった。

それが、今自分が使用している陸戦ユニットであった。

「そろそろ新米さんがいる地点なのだが……」

エンジンオイルの焼けたにおいがしないか、人間の声が聞こえないか、空軍のカールスラントグレーの制服が見えないか、そして目印の白いスカーフか木の枝に縛られていないか、五感を研ぎ澄ませてあたりをさぐる。

もつとも、そう簡単に見つかるものでもない。

「さてはて、どこにいるやら」

戦闘脚を待機状態にして地面に立つ。

そして、手頃な近くの木にのぼってあたりを見回した。巣がさほど遠くない場所にあるからか、木の間に大型の陸戦ネウロイが見え隠れしていた。

「くわばらくわばら、と……ん？」

視界に、妙な違和感を抱いた。気になってそのあたりをよく見てみると、普通の人間なら、まず気づかないような白い点が見える。

おそらくあれだろう。

巨木の枝に目標は結ばれていた。

前方、およそ三百メートルといったところか。

すると下に降りて陸戦ユニットをはくと、スカーフの木の下の下へむかう。

木の根元、ウロの中に救出対象は隠れていた。ジークリンデ少尉は、体力温存を考えてのことだろうか。体を丸くして眠っていた。いい判断といえるだろう。

「待たせたな。自分は扶桑陸軍少尉、初美あきらだ。貴君がジークリンデ・レムケ少尉か」

少尉にそう声をかけると、彼女は目をこすりながら起きてきた。

「ん……ああ」

眠気まなこをこすって、純朴そうなウィッチは顔を上げた。

「おはよう。まずは水と食料だ」

「雷に衣渡白蛇は衣筒りを攪拌する。いたポーチから携帯食料の乾パン、それにソーセージを一本取

「ありがとう、えーと……」

「初美だ。初美あきら少尉」

水を飲み、乾パンやソーセージを食べる音が聞こえる。

「貴君の上官や友人が自分に依頼してきたのだ。感謝はありがたいが、彼らにこそ感謝を捧げて

ほしう」

がさ、と前方で音が聞こえる。

蛇だ。



すぐさま、懐から棒手裏剣を取り出し、蛇の頭に向けて打つ。手裏剣はずどんと音を立てて蛇の頭を貫通し地面に縫い付けた。うねるようにのたうち、串刺しにした手裏剣からのがれようとする。「初美少尉、いまなにを」

「蛇がいたのでな」

直ぐにそいつを回収して蛇の口に脇差で切れ目を入れ、頭と顎をつかみ、一気に引き裂く。すると、簡単に皮と内臓が剥がれた。蛇は、こうすれば腑分けをする必要がなく、楽に食せる。

体験版はこれで終了です。続きは、本編にてお楽しみください。